



ファンタジーは現実とどう関わるか (下)

—魔法と超能力—

きごのりこ



魔法とその使い手の変遷

以前に『魔法のファンタジー』（ファンタジー研究会編・てらいんく）の中で私は「魔法」を、ある行為によって非日常的な現象が生じることに限定し、その現象の中には時間・空間の移動や姿をくramsすことはもとより、他者の心を誑んだり支配したりする心的なものも含まれる、と記した。それは古典的には杖や呪文、剣や石などのアイテムや、場所の持つ力、歌や楽器の調べ、魔力を持つ者の行動などによって引き起こされる。

古典的ファンタジーでは、これらの魔法をあやつるのは魔法使いであり、魔女であり、妖精たちだった。しかし現在、児童文学の中でこれらの魔法の使い手は、物語の主人公である現実の子どもたちに移行している。そのことを『魔法のファンタジー』の中では一九五〇年代以降現代にいたるまでの作品の変遷を通して述べた。そして今、物語の中ではさまざま

まな能力を持つ子どもたちが登場している。「魔法」というよりも「超能力」といった言葉がふさわしいその力は、現在のこの世界の中で社会的弱者として抑圧され、生き難さを増している子どもたちの現実をあらわしているようでもある。

しかしその憂さを晴らす代償行為としてではなく、楽しく活力にあふれたファンタジーの方法として捉えてみたい。五〇年代までの子どもと魔法の力との関係は、ネズビットの『魔よけ物語』（講談社）のように子どもたち自身は魔力を持たず、時間・空間を移動するには、砂の妖精サミアッドによる「お守りの石」にお願いしなければならなかった。「ナルニア国ものがたり」にも多くの魔法が登場するが、子どもたち自身は魔法とは無縁だった。六〇年代のアラン・ガーナーに至って古い悪の魔法に子どもたち、若者たちが対決し、解き放つという場面が描かれるようになり、スーザン・クーパーのような作家に受け継がれていく。一方では「魔力」よりも人間の意志、叡智を尊重する傾向が